

平成二十九年 度

和歌山信愛中学校

入学試験 前期日程

国 語 (六〇分 一〇〇点)

受験上の注意

- 一 この問題冊子は、1ページから21ページまであります。開始のチャイムが鳴ったら、確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題冊子と解答用紙の両方に書きなさい。
- 三 解答は、すべての解答用紙に書きなさい。
- 四 終了のチャイムが鳴ったら、問題冊子の上に解答用紙を開いたまま裏返しておきなさい。

受験番号

〈解答は、句読点や記号も一文字分と数えて記入すること〉



【一】次の問いに答えなさい。

問一 ①～④の――線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。また、⑤～⑩の――線部のひらがなを漢字に直しなさい。

- ① しっかりとした原案を練る。
- ② 牧羊犬が羊を追う。
- ③ 納税は国民の義務だ。
- ④ 貴重品を管理する。
- ⑤ 鏡に姿をうつす。
- ⑥ 勉強にせんねんする。
- ⑦ ピザをたくはいする。
- ⑧ 人工えいせいを打ち上げる。
- ⑨ えんげき部に入る。
- ⑩ きけんな運転をしない。

問二 ①～④の空欄(らん)について、後の□の中のひらがなを漢字に直して、対義語(意味が反対になる言葉)や類義語(意味がよ  
く似た言葉)になるように書きなさい。 □の中のひらがなは一度だけ使い、解答欄には漢字一字を答えなさい。

〈対義語〉

① 生存 — 死 ( )

② 難解 — 安 ( )

〈類義語〉

③ 助言 — ( ) 告

④ 勇気 — 度 ( )

い ・ きょう ・ ちゅう ・ ぼう

問三 次の①～④が下の意味に合う四字熟語になるように、空欄A～Fに入る漢数字をそれぞれ答えなさい。

① A 転 B 倒 (転げ回って苦しみもだえる)

② C 載(ざい) D 遇(ぐ) (めったにない良い機会)

③ E 人 E 色 (人の好みや考えはそれぞれちがう)

④ C 変 F 化 (めまぐるしく変わる)

問四 次の（ ）に入る接続語を次の中から選び、記号で答えなさい（同じ記号は一度しか使えません）。

- ① テストで百点をとった。（ ） 、とてもうれしかった。
- ② 彼はスポーツが得意だ。（ ） 、勉強もできる。
- ③ あの女の子は私の母の兄の娘、（ ） いところです。
- ④ 日本にも活火山があります。（ ） 富士山です。
- ⑤ 一年生（ ） 二年生で地域の清掃活動を行います。
- ⑥ 天気がよくなってきた。（ ） 気温は下がってきた。

ア	しかし	イ	および	ウ	だから	エ	ところで	オ	つまり	カ	さらに	キ	たとえば
---	-----	---	-----	---	-----	---	------	---	-----	---	-----	---	------

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

庭の草むしりは、大変な作業である。

しかも憎らしいことに、きれいに草むしりをしたつもりでも、一週間もすれば、また雑草が生えてきてしまう。どうして、雑草はこんなにもしつこいのだろう。

① 草むしりをして、雑草が芽生えてくるのには、理由がある。じつは、人間が草むしりをするによって、雑草の発芽が引き起こされているのである。

じつは、雑草の種子の多くは、光を当てると発芽が始まる「光発芽性」という性質を持っている。つまり、雑草の種子は光を感じて発芽を始めるのである。種子に光が当たるということは、まわりにライバルとなる植物がまったくなくなったということ在意味している。そのため、光が差し込むのを合図に、雑草の種子は一斉に芽を出すのである。

草むしりをする、まわりの雑草がなくなって地面に光が当たる。そして、土がひっくり返されると、土の中にまで光が差し込む。すると、それまで眠っていた雑草の種たちが一斉に発芽を始めるのである。

「雑草のように強い」と比喻されるように、雑草には「強い」というイメージがある。しかし、植物学では、雑草は強い植物であるとはされていない。むしろ、「雑草は弱い植物である」と言われている。これは、どういうことなのだろうか。

植物は、光や水、生育場所を奪い合って、激しく競争を繰り返している。雑草はそのような植物間の競争に弱い植物である。そのため、たくさん植物が生い茂るような自然豊かな森の中には、雑草と呼ばれる植物群は見られない。

つまり、② 雑草は、他の植物が生えることのできないような場所を選んで生息しているのである。それが、よく踏まれる道ばたや、草取りが頻繁に行われる畑の中など、人の暮らす場所なのである。草取りをしたり、耕されたりすることは、雑草にとっても過酷なことである。しかし、そうして人間が草取りをやめれば、競争に強い植物が次々と侵入して、植物どうしの戦いの末に、や

がて雑草を※駆逐してしまおう。

それでは③ 私たち人類が出現する以前に雑草はどのような場所に生活していたのだろうか。

雑草の起源は氷河期に遡ると言われている。競争に弱い雑草は、他の植物が生えるような場所には生えることができない。氷河期になると、気候も不安定になり、また造山運動によってさまざまな地形が作られるようになった。そして洪水が起る河原や土砂崩れ後の山の斜面など自然界に偶然できた不毛の土地が雑草の祖先の棲みかとなった。人間がいなかった時代、彼らの生活場所は、特殊な限られた場所だったはずである。

しかし、人類が出現して彼らの生息範囲は一変した。ヨーロッパでは新石器時代の遺跡から雑草の種子が見つかっている。人間が村を作り、人間としての歴史を始めた時、そこにはすでに道ばたの雑草の姿があつたのである。農耕が始まると村で暮らしていた雑草たちのいくつかは畑にも侵入していった。

とはいえ、人々が暮らすような場所は、植物の生存に適しているとは言えない。そこで、雑草は農作業や草取りなど人々の暮らしに適応して進化を遂げて繁栄していったのである。雑草は、人類と歴史を共にしてきた。そして、今や雑草は、人間なしには生きていけないほどまでに進化を遂げている。

人類は長い歴史の中で、野生の植物を改良して多くの作物や野菜など栽培植物を作り出ししてきた。ところが④ 勝手に生えているように見える雑草も、じつは、はからずも人間が作り出した植物なのである。

さて人間は雑草との戦いに終止符を打つべく、最終兵器を作り上げた。《A》それが「除草剤」である。《B》グリホサートを主成分とする「ラウンドアップ」という除草剤があるが、これは環境に対する負荷の少ない安全性の高い薬剤である。《C》しかしラウンドアップは、どんな植物も枯らしてしまうという欠点がある。《D》

こうして作物が植えられた場所でも安心してラウンドアップをまくことができるようになったのである。《E》このラウンドアップによって、畑から雑草はなくなり、農業における雑草問題は解決されたかのように思われた。しかし、やが

て、どんな植物をも枯らしてしまおうラウンドアップを掛けても、枯れない雑草が現れ始めた。これがグリホサート抵抗性雑草である。このスーパー雑草が今、<sup>※</sup>蔓延し始めているのである。

除草剤の効かない雑草の出現に対して最新の研究では、除草剤に頼らず、耕したり、植え付け時期を工夫するなどして、雑草の害を抑える方法が採用されている。

人類の農耕の歴史は、<sup>⑤</sup>雑草との戦いの歴史だったとも言われている。いつの時代も、人と雑草とは戦いを繰り返してきた。それは科学が発達した二十一世紀になっても何一つ変わっていない。雑草と人との知恵比べは現代でも続いている。人間が繁栄する限り、雑草たちの繁栄もまた続くのである。

一般的にエリートではない、無名の努力家たちは「雑草軍団」と評価される。

雑草軍団に、けっして悪いイメージはない。むしろ「温室育ちのエリート集団」と言う方が **X** につく感じた。苦勞の末に花を咲かせた「雑草」に、人々は感嘆し、惜しめない拍手を送るのである。

何とも不思議な話である。雑草は困り者で、人々は雑草と激しい戦いを繰り返してきた。それなのに、<sup>⑥</sup> どうして雑草に良いイメージがあるのだろうか。

ただし、「雑草軍団」や「雑草魂」のように、雑草に良いイメージがあるのは、私を知る限りでは、日本人くらいのものである。日本の雑草が、世界の国々に比べて困り者ではないかと言えば、そんなことはない。むしろ、日本の雑草はかなり手強いと言っている。

何しろ、高温多湿な日本では、雑草はすぐに伸びてくる。数か月も草取りをせずに畑を放っておけば草ぼうぼうになって、覆い尽くされてしまう。庭の草は取っても取ってもすぐに生えてくる。年に何回も行われる公園や道路脇の草刈りには、毎年膨大な予算が使われている。農業にとってはもっと深刻で切実な問題だ。一方、欧米では、雑草は日本ほどは伸びてこない。日本人の方が、ずっと雑草に **Y** を焼いてきたのだ。それなのに、どうして、日本人は困り者の雑草を愛するのだろうか。



高温多湿で、植物の成長が早い日本では、自然は豊かな恵みをもたらしてくる一方で、雑草という脅威きょういとなって人間に襲おそいかかってきた。そして、日本人はその脅威と全力で向き合っていたのだ。

その結果、どうだっただろう。厳しい雑草との戦いを通して、人々はそこに尊敬の念を抱いだかずにはいられなかったのではなからうか。日本人にとって、手強い敵である雑草は、良きライバルのような関係だったのかも知れない。

注 ※ 駆逐：追おい払はらうこと。

※ 蔓延：好ましくないものがはびこり、広がること。

(稲垣 栄洋 『たたかう植物——仁義なき生存戦略』より)

問一 ——線部①「草むしりをして、雑草が芽生えてくるのには、理由がある」とありますが、「草むしりをして、雑草が芽生えてくる」理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 草むしりをする事で周りのライバルが減り、養分が行き届くようになるから。
- イ 草むしりをする事で土がやわらかくなり、雑草の種子が芽生えやすくなるから。
- ウ 草むしりをする事で土が掘ほり返され、雑草の種子に光が当たるようになるから。
- エ 草むしりをする事で弱い雑草がなくなり、強い雑草だけが残ることになるから。
- オ 草むしりをする事で種子が刺激され、新たに光発芽性を持つようになるから。

問二 ── 線部② 「雑草は、他の植物が生えることのできないような場所を選んで生息しているのである」とありますが、それはなぜですか。本文中の言葉を使って、三十五字以内で答えなさい。

問三 ── 線部③ 「私たち人類が出現する以前に雑草はどのような場所に生活していたのだろうか」とありますが、人類が出現する前に雑草が生育していた場所を最も端的たんに表した部分を、本文中から十五字以内でぬき出しなさい。

問四 ── 線部④ 「勝手に生えているように見える雑草も、じつは、はからずも人間が作り出した植物なのである」とは、雑草のどういう点を指して言っているのですか。「く点。」に続く形で、本文中から二十五字以内でぬき出しなさい。

問五 次の一文は、本文中の《A》《E》のどの部分に入れるのが最も適当ですか。記号で答えなさい。

そこで作物の遺伝子を操作してラウンドアップの効かないバイオタイプが作り出された。

問六 線部⑤「雑草との戦い」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人間の暮らす場所をどんどん奪<sup>うば</sup>っていく雑草をくいとめようとする戦い。
- イ あらゆる手を尽くしてもなくならない雑草をなんとか抑<sup>おさ</sup>えようとする戦い。
- ウ 人間が食用にする作物に害を及<sup>およ</sup>ぼす雑草だけをなくそうとする戦い。
- エ グリホサート<sup>ていこう</sup>抵抗性をもったスーパー雑草の蔓延<sup>まんえん</sup>を防ごうとする戦い。
- オ 雑草にまけない強い強い作物を遺伝子操作によって作り出そうとする戦い。

問七 本文中の X、Y に当てはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。

問八

——線部⑥「どうして雑草に良いイメージがあるのだろうか」とありますが、日本の人々が雑草に対して良いイメージを持つようになった理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 地球上のあちこちで大規模に森林が伐採され、地球温暖化が問題となったが、人間の生活とともに歩んできた雑草の大切さをもう一度見直そうという気運が高まったから。

イ 高温多湿という植物の生育に有利な風土の中で、めざましい進化を遂げてきた雑草は、私たち人間に対する脅威であると同時に、多大な恵みをもたらしてくれる存在であるから。

ウ 高温多湿であらゆる植物の成長に適した風土の中で、他の植物に駆逐されることなく子孫を残し続けてきた雑草の巧みな知恵に人々は感嘆せずにはいられなかったから。

エ 風土が植物の成長に適しており、人々はその恵みを十分受けてきたと同時にその脅威とも全力で戦ってきたため、雑草の強い生命力に尊敬の念を抱くようになったから。

オ 人口が増え、都市化が進むようになって、身近なところの植物がどんどん減少していった結果、コンクリートの隙間に生える雑草に人々は安らぎを覚えるようになったから。

問九 本文の内容に合うものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間が村を作り始めたときからすでに雑草とともに歩んできたということは、ヨーロッパの新石器時代の遺跡から雑草の種子が見つかったことからわかる。

イ 人類は長い歴史の中で、野生の植物を改良して多くの作物や野菜などの栽培植物を作り出し、さらに多くの雑草をも意図的に作り出した。

ウ 世間でよく言われる「雑草軍団」とはエリートではなく努力だけでのし上がってきた人々を指し、いいイメージの言葉として使われることは少ない。

エ 欧米では放っておけば広大な土地があつという間に草ぼうぼうになってしまったため、毎年、行政の膨大な予算が草刈りにあてられている。

オ 除草剤の効かないスーパー雑草に対しては、雑草ごと耕したり、雑草の生える時期と作物の植え付け時期をうまくずらすなどして対処する方法がとられている。

カ 雑草は人間の長い歴史とともに歩んできた植物であり、人間は雑草を駆逐するだけでなく、うまく共存していく方法を考えていかなければならない。

【三】主人公の「私」(紀子)は小学四年生で、六人グループをつくっていた。好恵はそのグループの一人で、クラスの人気者でもある。グループの子供たちは順番に誕生日会をしていた。その年の六月、好恵の誕生日に「私」たちはいそいそとプレゼントを持って好恵の家に行き、プレゼントを渡すが、ケーキやごちそうはなく、誕生日会のムードがない。そこに好恵の母がやってきて、「うちは誕生日会をやらなかったことになっているの」と言われ、帰されてしまう。そこで「私」たちは好恵に反感を抱き、ひそかに復讐をくわだてる。それに続く次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

七月八日。七夕の翌日にあたる私の誕生日は日曜日だった。この年も織姫と彦星は逢えず、母は朝から窓辺に垂らしていた笹を片付けると、代わりに折り紙や紙テープで居間を彩った。すでにごちそうの下準備は整えられ、冷蔵庫には子供心をそそる食材がばんばんに詰まっている。中でも一際目を引いたのは、『HAPPY BIRTHDAY NORIKO』とホワイトチョコで描かれた手作りのチョコレートケーキだ。食器棚には数々のお菓子もスタンバイされていて、中には普段あまり食べさせてもらえない体に悪そうなものもある。これがいつもの誕生日なら、私は幸福度二二〇パーセントで宙に浮いていたことだろう。

しかし、<sup>①</sup>私は疲れきっていた。

好恵を誕生日会から締めだすことに決めたあの日から三週間、私は人の視線とはこんなにも怖いものかとつくづく思い知らされながら過ごした。いつ、好恵に誕生日会のことをきかれるのか。いつ、好恵は自分が誕生日会に招かれないことを悟るのか。私は絶えずびくびくと好恵の視線ばかりを気にしていたのだ。

好恵に「おはよう」と声をかけられるだけで、私は招待状の催促でもされたように顔を赤くした。会話の途中で沈黙が訪れるたび、「ところで、紀ちゃんのお誕生日会だけど……」と切りだされるのではないかとどきまぎした。毎日が緊張の連続。七月八日が近づくほどにその緊張は高まっていった。

これほど自分が小心者とは知らなかった。復讐がこれほどの苦痛を伴うものとも知らなかった。ついに誕生日を迎えたその日、

だから私は誕生日会やプレゼントの喜びより、ようやくその苦痛から解放される喜びの方が大きかったのだ。

誕生日会は滞りなく進んで、終わったと思う。もともと滞りなど起こりようもないパーティーだ。まずはケーキのろうそくに火を灯し、部屋を暗くして「ハッピー・バースデー・ツー・ユー」の合唱。それから十の炎を吹き消し、パチパチと拍手。再び部屋に明かりが灯り、みんなからプレゼントをもらって、ようやくごちそう。皿の空いた座卓にはお菓子が並び、その余りは夕方、母がちり紙にくるんでプレゼントのお返しとともに配る。お決まりの儀式。この段取りさえ押さえればまず失敗はない。なのに好恵はそれすらしてもらえなかった。好恵の十歳の誕生日にはケーキもなかったのだ。

みんなの帰った後、急がらんとした部屋の中で、私は一気に脱力した。もらったプレゼントをしまうのもおついで、その場に散らかしたまま二階へ上がると、部屋のベッドにどてつとうつぶした。甘いケーキの味はとうに忘れ、苦い後味ばかりが残っていた。

一生に一度しかない十歳の誕生日。

もう永遠に取り戻せない特別な一日。

② 好恵はあの日、どんな思いで十代への第一歩を踏みだしたんだろう。

そして今日はどこで何を思い、過ごしていたんだろう。

私の誕生日が七月八日でなかったら、秋や冬の終わりのほうだったら、私は例年通りに何も考えず楽しい一日を過ごしていたはずだ。一年で一番幸せなはずの一日。なのに、好恵の次に生まれたばかりに……。

③ ついてない。

「紀ちゃん」

と、そのとき、襖のむこうから姉の声がした。

入るよ、とノックもせずに見えた姉は、ベッドに伏せた私のもとへずかずかと歩みより、黄色いリボンのかかったたんぽぽ文具店の包みを差しだした。

「今、家の前であなたの友達みたいな子に会ってき。これ、あなたに渡してって」

「え」

「直接渡せばって言ったら、自転車に乗っていつちやった」

④ 私は声もなくその包みを受けとった。姉が去ってからリボンをほどくと、包装紙にくるまれていたのは須田さん並みに豪華なサンリオ商品のセットだった。私の好きなリトルツインスターズのメモ帳もある。

「……………」

⑤ 気がつくと、足が勝手に私を運んでいた。私は階段を駆け下りて玄関をくぐりぬけ、庭先の自転車に飛び乗った。

自転車は私を好恵の家へ運んだ。

風も、地面も、すべてが私をそこへ運んでいく気がした。

好恵の家はあいかわらず整然と、一寸のゆるみもなしに佇んでいた。軒先に縦列された二台の自転車の片方は、ついさっき好恵が停めたものにちががなく、私はその几帳面な停めかたに学校における彼女とのギャップを感じながら、自分の自転車を荒っぽく乗りすてた。それから一つ深呼吸をして玄関へ向かった。

熟柿のような電球に照らされたブザーに手を伸ばすのには、勇気がいった。私は好恵と会うのが気まづいだけでなく、あの日、あんなにもはっきりと私たちを拒んだおばさんに会うことも恐れていたからだ。

どうか鬼母が出ませんように。

どきどきしながらブザーを押すと、数秒後に「はい」と低い声がして、扉が開かれた。

「ひっ」

現れたのは鬼母だった。



「あ……ら」

エプロン姿のおばさんは、濡れた手をそのポケットのあたりでぬぐいながら、私に困惑の目をむけた。夕食時のせい、扉のむこうからは炒め物のいい匂いが香ってくる。後ずさる私を前に、おばさんはその匂いをたどるようにふりかえり、好恵はどうのつぶつぶ言いながら奥の部屋へときびすを返した。私のことを憶えていたらしい。

数秒後、重たい足音と共に好恵が現れた。

「どうしたの」

開口一番に問われ、私は「たじろいだ。好恵の声には「なんか用？」とでもいうような、白々とした響きがあったからだ。

「あの……その、プレゼントありがとう」

言葉につまった末、いきなり本題に入ると、

「え？ ああ、あれか」

自転車にはまだぬくもりが残っているはずなのに、好恵は遠い昔でもふりかえるようにわざわざ首を傾けた。リアクションの達人にしては鈍すぎる反応。⑥ 私はますます勢いをそがれて動揺した。すまし顔を明後日の方向へむけている好恵を見ると、自分ここに何を期待して来たのかわからなくなってくる。

苦しい沈黙の末、⑦ ひとまずここは撤退だ、と逃げることにした。じゃ、それだけ、と早口で言いながら背をむけ、ドアノブに手をかける。

「夕ごはん……」

と、そのとき、背中からおばさんの声が出た。

「夕ごはん、まだなら食べていきなさい」

最初のうち、私はそれが自分に向けられた言葉とは思えなかった。あのおばさんがこんなことを言うわけがない。しかし、ふり

むくとおばさんは怖いくらいにまつすぐに、確かに私を見つめていた。

「はい」

どうしてか「いいえ」と言えなかった私は、この夜、おばさんや好恵の後について居間へ通され、まつ毛のあまりないカーリーヘアのお姉さんや、驚くほど汚い言葉を連発する弟と夕食をとにもするはめになった。おじさんの姿は見えず、「ジジイは接待バカゴルフ」と弟がその理由を説明した。

アジフライ。ピーマンとウインナーのいためもの。ツナサラダ。みそ汁。

テーブルの上はそれなりににぎやかだったけれど、しかし静かな晩さんだった。好恵は学校にいるときの十分の一もしゃべらず、お姉さんはぶすつとしていて、弟は悪たれをつき続け、それをおばさんが たしなめる。好恵のサービス精神は学校でのみ発揮されるのだと私ははじめて知った。私は緊張で口がこわばり、「もつと食べて」とうながすおばさんにうなずき返すのがやっとだった。

（森 絵都 『永遠の出口』より）

問一 〜〜線部 a 「おっくうで」、b 「たじろいだ」、c 「たしなめる」の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、

記号で答えなさい。

a おっくうで

- ア 面倒どうくさくて
- イ いらだたしくて
- ウ もったいなくて
- エ くやしくて

b たじろいだ

- ア つまづいた
- イ 恐れおののいた
- ウ ひるんだ
- エ 悲しんだ

c たしなめる

- ア どなりつける
- イ 注意する
- ウ 気にかける
- エ 無視する

問二 〜〜線部① 「私は疲れきっていた」とありますが、このとき「私」が「疲れきっていた」のはなぜですか。本文中の言葉

を使って、四十字以内で説明しなさい。

問三 ――線部②「好恵はあの日、どんな思いで十代への第一歩を踏みだしたんだろう」とありますが、ここからうかがえる「私」

の気持ちを説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 誰からも誕生日を祝ってもらえなかった好恵のことをばかにする気持ち。

イ 子どもの誕生日なのに誕生会をしない好恵の母親に対して腹を立てる気持ち。

ウ グループの中で孤立こ立こすることになった好恵をさらに苦しめたいという気持ち。

エ 誕生会してもらえず、誕生日のケーキもなかった好恵に同情する気持ち。

オ 復讐しゅうをするために好恵を誕生会に呼ばなかったことに対して後悔する気持ち。

問四 ――線部③「ついてない」とありますが、ここで「私」はなぜ「ついてない」と思っているのですか。その理由を、本文

中の言葉を使って、三十五字以内で説明しなさい。

問五 ——線部④「私は声もなくその包みを受けとった」とありますが、この時の「私」の様子を説明したものとして最も適当

なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 直接自分に誕生日プレゼントを渡さず、わざわざ姉に持ってこさせた好恵のことを不快に思っている。
- イ まさか好恵から誕生日プレゼントをもらえると思っていなかったもので、とても喜んでいる。
- ウ 誕生日プレゼントを持ってくるという思いがけない好恵の行動に対して、ひどく驚いている。
- エ 姉から手渡された包みが、好恵からの仕返しの商品ではないかとびくびくしている。
- オ 好恵がいつたいどんな誕生日プレゼントをもってきたのか、その中身が気になっている。

問六 ——線部⑤「気がつくと、足が勝手に私を運んでいた」とありますが、この時の「私」の気持ちを説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 誕生会に呼ばなかったのに、プレゼントを無理やり渡す好恵に嫌悪を感じ、早く文句を言わなければと思っている。
- イ 誕生会に呼ばなかったのに、プレゼントを持ってきた好恵に申し訳なさを感じ、早くお礼を言わなければと思っている。
- ウ 誕生会に締め出すと決めてそうしたのに、プレゼントを持ってきた好恵の意図がわからず、早くそれを聞こうと思っている。
- エ 誕生会にたくさんプレゼントをもらって満足しているので、好恵からのプレゼントを早く返してしまいたいと思っている。
- オ 誕生会にはプレゼントを忘れてきたが、遅れてプレゼントを持ってきた好恵の気持ちを考え、早く謝ろうと思っている。

問七 ——— 線部⑥ 「私はますます勢いをそがれて動揺した」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア プレゼントのお礼を言うと、好恵を仲間はずれにしたことで嫌味を言われると思っていたから。
- イ プレゼントのお礼を言うと、好恵から手ごたえのある反応が返ってくると思っていたから。
- ウ プレゼントのお礼を言うと、好恵もプレゼントのお礼を言ってくれると思っていたから。
- エ プレゼントのお礼を言うと、好恵の母親が出てきて、また怒られると思っていたから。
- オ プレゼントのお礼を言うと、好恵の誤解が解けて、仲直りができると思っていたから。

問八 ——— 線部⑦ 「ひとまずここは撤退だ、と逃げることにした」とありますが、「私」は「何」から逃げようとしていると考えられますか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 好恵に対する気まずさ
- イ 好恵に対する期待
- ウ 好恵の母に対する恐怖きょうふ
- エ 好恵の母からの仕返し
- オ 好恵の「私」に対する甘え

問九 本文の表現や内容に関する説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 紀子、姉、好恵、好恵の母など、様々な人物の視点からの描写を交えることで、それぞれの登場人物の心情がより伝わるような工夫がされている。

イ 「た」や「だ」で終わる短い文で全体が描かれており、物語全体が過去の回想であることを示すとともに、誕生会の出来事を強調する効果を発揮している。

ウ 紀子たちを追い返した好恵の母を、「鬼母」というくだけた言葉で表現することによって、深刻になりがちな話にユーモラスな味わいを与えている。

エ 誕生会に呼ばれなかったことを少しも気にとめていない好恵の落ち着いた様子を丁寧に描くことで、好恵とは対照的な紀子の平凡さを際立たせている。

オ 主人公の紀子の視点で物語は進んでいくが、「重たい足音」、「自転車にはまだぬくもりが残っている」などの表現によって、好恵の心情もうまく想像させている。

Answer number input box

問一		⑤	①
す	る	⑥	②
⑦	③		
⑧	④		
⑨			
⑩			

問二	①		
②	②		
③	③		
④	④		
問三		A	B
		C	D
		E	F

問四	①				
②	②				
③	③				
④	④				
⑤	⑤				
⑥	⑥				

問一

--

問二	

問三

問四	
点。	

問五

--

問六

--

問七

X
---

Y

--

問八

--

問九


問一

a
b
c

問二	

問三

--

問四	

問五

--

問六

--

問七

--

問八

--

問九

--



【一】

問一	問一
⑤ 映す	① ねる
⑥ 専念	② ぼくよう
⑦ 宅配	③ のうぜい
⑧ 衛星	④ きちよう
⑨ 演劇	⑩ 危険

問二	問二
① 亡	② 易
③ 忠	④ 胸
問三	問三
A 七	B 八
C 千	D 一
E 十	F 万

問四	問四
① ウ	② カ
③ オ	④ キ
⑤ イ	⑥ ア

【二】

問一	問一
ウ	ウ

問二	問二
激し	雑草
いは	は光
競争	や水
に弱	、生
い植	育場
物だ	所を
から	奪い
。合	う植
物	物
間	間
の	の

問三	問三
自然	自然界
に偶	然
で	き
た	不
毛	の
土	地

問四	問四
てい	人々
つた	の暮
ら	し
に	に
適	応
し	し
て	進
化	を
遂	げ
て	繁
榮	榮
し	し

問五	問六
D	イ

問七	問七
X 鼻	Y 手

問八	問九
エ	ア
オ	オ

【三】

問一	問一
a ア	b ウ
c イ	c イ

問二	問二
つと	好恵
好恵	を
の恵	誕
視	生
線	日
ば	招
か	待
り	し
を	な
気	い
に	と
し	決
て	め
い	て
た	か
か	ら
ら	、
。	ず

問三	問三
エ	エ

問四	問四
過	好
ご	恵
す	の
こ	次
と	に
が	生
で	ま
き	れ
な	た
か	せ
っ	い
た	で
か	、
ら	楽
。	し
い	誕
生	日
を	を

問五	問六
ウ	イ

問七	問八
イ	ア
オ	オ

平成二十九年 度

和歌山信愛中学校

入学試験 中期日程

国 語 (六〇分 一〇〇点)

受験上の注意

- 一 この問題冊子は1ページから18ページまであります。  
開始のチャイムが鳴ったら、確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題冊子と解答用紙の両方に書きなさい。
- 三 解答は、すべて解答用紙に書きなさい。
- 四 終了のチャイムが鳴ったら、問題冊子の上に、解答用紙を開いたまま裏返して置きなさい。

受験番号

〈解答は、句読点や記号も一字分と数えて記入すること。〉



【一】 次の問いに答えなさい。

問一 次の①～③の――線部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。また、④～⑧の――線部のひらがなを漢字に直しなさい。

- ① アドバイスが効いたようだ。
- ② チームの要となるキャプテン。
- ③ 電車が立ち往生する。
- ④ 信頼関係をきずく。
- ⑤ ひきこもごもの合格発表。
- ⑥ 布をさいだんする。
- ⑦ 飛行機をそうじゆうする。
- ⑧ はくがくたさいなクラスメート。

問二 次の漢字を使った二字の熟語を、それぞれ三つずつ答えなさい。

- ① 察
- ② 任

問三 次の各文が筋の通った文章になるように並び替えて、最初から順に記号で答えなさい。

① ア もう一度言ってもらったが、やっぱり聞き取れない。

イ レジでお金を払おうとしたら、店員に何か言われたが、聞き取れない。

ウ 呆然としてみると、店員が肩をすくめて「もう、いいよ。」とあきらめ顔をした。

エ スーパーでグラスを買った。

② ア 反対に、変わった表現で制作をすると、どんどん自分の本質が作品から消されていってしまうのです。

イ このように、個性的と思ってやればやるほど、むしろ人間の心の限界が見えてしまうのが絵なのです。

ウ 素直に描く絵には、自然と自分が出ます。

エ 自分がどこかにいってしまい、わからないという絵になってしまいます。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 昔の日本人は今の日本人とは違った歩き方をしていたと言うと、たいていの人は驚く。昔の日本人は、手足を互い違いに出す今のような歩き方はしていなかった。いわゆるナンバと言われる、右手と右足、左手と左足とが、それぞれ同時に前に出るような歩行の仕方であっていたのである。腰から上を大地に平行移動させるようにして、すり足で歩いていた。いまでも能や歌舞伎、あるいは剣道などには②この歩き方が残っている。

なぜこのような歩き方をしてきたかといえ、生産の基本が農業、それも水田稲作にあつたからである。稲の生育を注意深く見守るためには、走ったり跳んだりすることは無用だった。事実、いまでも、浮き足立つとか跳ね上がるという言葉は、日本語では悪い意味である。ところが、西洋のたとえばバレエでは、浮き足だったり、跳ね上がったたりしないことには踊りにならない。バレエは、遊牧を生産の基本とする文明によって育まれたのである。すり足ナンバでは、馬に乗って羊を追う仕事など、むしろできはしない。

バレエはヨーロッパの古典舞踊ということになっているが、その原型は中央ユーラシアの遊牧民の舞踊にある。いまでも、チベットやモンゴルの踊りに、バレエとまったく同じ所作を見いだすことができる。他方、能に象徴されるすり足ナンバの舞踊は、**X**を生産の基本とする東南アジア一帯に広く見られる。インドネシア、タイ、ベトナム、さらに沖縄、日本と広がる舞踊文化の豊かさには目を見はるが、それを貫くのは、すり足ナンバという身体所作である。

昔の日本人はと言ったのは、むしろ、今の日本人は西洋人と同じ歩き方、同じ走り方をするようになってしまったからである。というより、いまや、世界中のどこでも同じような歩き方、走り方をするようになってしまったのだ。産業革命以降、生産の基本が、農耕でも遊牧でもない、工業に移行してしまつたからである。言つてしまえば、産業革命は均質な商品だけではない、均質な身体をも大量に生み出したのである。学校、軍隊、工場は、そういう身体だけが必要としたのだ。

こういうことを話すと、じつは日本人以上に、西洋人が驚く。それもかなり激しい驚き方をする。考えてみれば当然で、日本人の身体は、ここ一世紀のあいだに極端たに変わった。わずか数世代のあいだに、水田稲作型の身体から、工業型の身体へと急激に変わったのである。むろん、西洋においても変化がなかったわけではない。が、遊牧型の身体から工業型の身体への移行はよりなだらかだったと言っている。日本人のほうが、はるかに変化に自覚的でありえたわけである。

けれど、その日本人にしても、変化をたんなる数値的なものとして受け取りがちである。西洋の風習が※伝播ぱし、食生活が変わり、畳たたみの生活から椅子いすの生活へと移って、日本人の体型も西洋人なみになってきたというようである。実際は、身体のかたち以上に、そのYYにおいて激しい変化が起こっていたにもかかわらず、そういうことはなかなか気づかれない。昔の日本人は今日本人とは違う歩き方をしていたと聞いて、たいていの日本人が驚くのがその良い例である。歩き方だけではない。笑い方も泣き方も、話し方も歌い方も、微妙びみょうに変化してきているのである。

今の日本人は昔の日本人以上に身振りぶりが大きくなってきている。表情が明確になり、派手になってきている。おそらく、年配の方の多くがそう感じているだろう。昔はむやみに感情を表すのは下品とされたが、今ではまるで逆であるというように。

こういう※述懐かいが端的たんに示すのは、③ 身体所作の変化は個人の問題ではなく集団の問題だということである。たとえば両手を広げて肩かたをすくめたりするなどは、昔はまったく見られなかったが、今ではよく見かける。肩で風を切って歩く女性にしてもそう。人は身体所作を、他人に対するひとつの表現として、あたかも言語のように用いているのである。それは、習得され伝播する、ひとつの文化なのである。

とすれば、人は意識において考えるよりも先に、まず身体において考えていると言うべきだろう。ある身体所作の体系を採用したその段階において、人の身体は、意識よりも先にすでに考えは始めているのだ。少なくともある種の考え方、思考の流儀りぎを採用しているのである。そういえば、十九世紀の小説の名手たちは、登場人物を描えがくにあたって、何よりも、その顔かたちと身みごなしを克明くめいに描きだしていた。思想はまずその身体に現れると直観ちくかんしていたに違いない。

身体の問題というとは、人はまず自分の身体を眺める。手を見、腕を見、さらには我が身を鏡に映しだしてみる。Ⅰ、身体というとは、人はまず個人の身体を思い浮かべるのだ。Ⅱ、たいていは、どこかしら恥ずかしくなって、肩をすくめる。身体は個人に属するのであって、集団に属すわけではないというわけだ。Ⅲ、ほんとうはそうではない。しぐさや表情にしてもそうだが、身体の基盤は共同体にあると言つていいほどなのである。

また、身体の想像力の問題がある。想像力といえ、意識の問題と考えられがちだが、そうではない。それはまず身体の問題なのだ。Ⅳ、人はなぜスポーツを観戦するのか。勝敗の行方を見極めたいと思うからか。そうではない。人の身体の動きに同調してみたいのである。相撲で、ひとりの力士が土俵を割りそうになりながら残すとき、見るものも同じように反り身になって相手の回しを握り締めているのである。だからこそ、手に汗握るのだ。つまり、スポーツを見るものは、そのスポーツと一緒に戦っているのである。野球にしてもそうだ。投球が決まった一瞬、まるで指揮者にあやつられたように、会場の全体がどよめく。投手や打者の呼吸に、全観衆の呼吸が同調しているからである。つまり、それは身体の想像力が働いているということなのだ。身体がまず他人の身体になりきる。その運動、その緊張、その痛みを分け持つてしまう。想像力の基盤は身体にあるとさえ言いたくほどである。

舞踊に関心を持つようになってはじめて、以上の事実に気づいた。人はなぜダンスを見るのか。何よりもまず身体そのものが、他人の身体と同調したいからなのだ。舞台を見るととき、人は、ダンサーとともに踊っているのである。回転し、跳躍しているのである。だからこそ、見終えた後に、快い疲労を覚えるのだ。また、だからこそ、より美しく舞うもの、より華やかに踊るものに惹かれるのである。スポーツにしても同じだ。人は、より強い、より美しいフォームに惹かれる。身体の想像力の限界を試そうとでもするように、人は舞台を見る。試合を見る。④ **見ているのは目ではない。身体なのだ。**

そういえば、昔はよく、尊敬する人物の肖像や彫像を机上に飾つたものだ。なぜか。見ることが、全身的な行為であると思われられていたからである。意識の想像力以上に、身体の想像力が重要であることが、直観的に把握されていたからだ。人物だけで



はない。たとえば雄大な光景は人を雄大にする。人は全身で見るのであり、見た瞬間、何よりもまず身体がその対象に同調しようとするのだ。

このように考えると、身体の問題がいかに重要かがわかってくる。ところが、近代になって、意識と身体は※画然と分けられた。同時に、五感とその領域も鋭く分割された。視覚の領域には美術が、聴覚の領域には音楽が配分された。また、身体の領域はただ健康の問題、医学の問題へと差し回されたのである。そして、ひたすら健康の技術にかかわるものとして、保健体育の思想が登場したのだった。

だが、いまや近代全体が問い直されているのである。美術も音楽も、いや文学さえもが、じつは全身的な感受の対象であることが明らかになりつつある。たとえば文体は、呼吸を通して全身にかかわるのである。芸術の鑑賞は、いまや身体の想像力を抜きに語ることはできない。だからこそ、意識と※不可分な存在としての身体について考えることには、大きな意義があるのである。

(三浦 雅士 『考える身体』より)

注 ※ 所作 … 身のこなし。しぐさ。

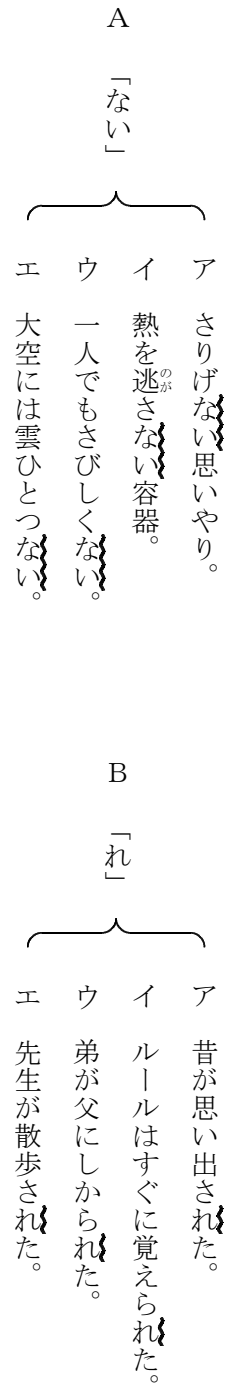
※ 伝播 … 伝わって広まっていくこと。

※ 述懐 … 心の中の思いを述べること。

※ 画然 … 区別がはっきりしているさま。

※ 不可分 … 分けることができないこと。

問一 線部A「ない」、B「れ」と同じ意味・用法のものをそれぞれア～エの中から選び、記号で答えなさい。



問二 線部①「昔の日本人は今の日本人とは違った歩き方をしていた」とありますが、その変化のきっかけとなった社会的な出来事は何だと筆者は言っていますか。本文中から四字でぬき出しなさい。

問三 線部②「この歩き方」とは、どのような歩き方ですか。本文中の言葉を使って、六十字以内で答えなさい。

問四 X に当てはまる言葉を、本文中から漢字四字でぬき出しなさい。

問五 Y に当てはまる言葉を、本文中から漢字二字でぬき出しなさい。

問六 ——線部③「身体所作の変化は個人の問題ではなく集団の問題だということである」とありますが、そう言えるのはなぜですか。「く」と考えられるから。」に続く形で、本文中の言葉を使って、六十字以内で説明しなさい。

問七  I  IV に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二度以上使ってははいけません。

ア むしろ      イ たとえば      ウ だが      エ そして      オ つまり

問八 ——線部④「見ているのは目ではない。身体なのだ」とありますが、「身体で見る」ということを、筆者はどのように考えていますか。それを説明した次の文の【 a 】には六字の言葉を、【 b 】には一字の言葉を、それぞれ本文中からぬき出して答えなさい。

【 a 】を働かせて、身体をその対象に【 b 】させるということ。

問九 本文の内容に合うものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本人の歩き方が変わり、身振りが大きくなったのは、社会が変わったからであり、このことから身体所作というものは社会の影響を強く受けるものであると言える。

イ 西洋人の身体が今も昔もまったく変わらないのは、遊牧型から工業型への社会の変化がなだらかなものであっただけでなく、西洋人の身体の基盤が共同体にはないからである。

ウ 想像力といえは意識の問題であり、どれだけスポーツ観戦をしても、その競技が上手くなるわけではないことからわかるように、身体には想像力がない。

エ 尊敬する人物の肖像や彫像を机上に飾ってその人物に近づこうとしたり、雄大な光景を見て雄大な気分になったりするの、意識の想像力によって呼び起こされるものである。

オ 近代は、意識と身体を画然と分け、身体の問題をただ健康や医学の問題へと差し向けてしまったが、近代全体が問い直されている今、意識と不可分な存在としての身体について考えることには、大きな意義がある。

カ 近代全体が問い直されているのは、意識と身体を分けたからではなく、五感とその領域を鋭く分割して、視覚の領域には美術を、聴覚の領域には音楽を配分してしまったからである。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「この家にはざしきわらしがいるよ。あれがいるかぎりには、あんたたちは大丈夫だよ。」

近所に住む占い師のすみおばあちゃんは、うちに来てお茶を飲むたびにそう言っていた。

私が十八になって大学に行くために実家を出るまで、すみおばあちゃんは私と顔を合わせるたびにそう言った。

「おばあちゃん、なんで私にそれを言うの？ だって私その子を見たことないもん。」

私はいつもそう言った。おばあちゃんはもうかなりの歳で話もあまり要領をえなかつたけれど、にこにこして答えた。

「だって、あんたには見えるはずだもん。急いでいるのをやめてちょっと止まったときなんかには、あんたにはきつと見えるもん。」

私には幽霊も見えないし、空飛ぶ円盤も見たことないし、何かを予知したことはないし、がちがちの理科系だし、だいたいそういうことをあまり信じていない。占いというものもあまりよくわからない。すみおばあちゃんのところには人がたくさんやってくるのはきつと、なにか確かなものを持っていてしっかりと落ち着いているおばあちゃんにみんな相談したいからなんだ、と思っていた。

もうちょっとおばあちゃんが若い頃に、ざしきわらしがいるとどうなるの？ と聞いてみたことがある。もちろん私もまだ子供だった。

「家がなんとなく栄えたような感じになって、商売も傾かないんだよ。」

とおばあちゃんが言った。

① そういえば、と私はそのとき思った。

うちの母は、ごく普通に片づけをしているだけで特に **A** にしているわけでもないのになんとなく家の中はいつもものすごく明るく見えた。たとえば近所にある廃校に行くと、定期的に手入れをしていて別に汚れてはいないのになんとなくうす汚れて見える、そういうものの逆で、なんとなく家の中のもののみなはちきれんばかりの果実のように生き生きとして見える。

植木鉢の植木も、庭の木も、めったに枯れなかった。びわも柿もたくさんあった。よく園芸好きの人から母はいろいろ聞かれていたが、なにもかわったことはしていない、と当惑していた。

父は小さい酒屋を営んでいたが、人がよすぎるので一人っ子の私はいつも心配していた。

ホームレスの人のためにわざと残ったお酒を裏口に置いておいたりして近所から苦情が来たこともある。それでも父は **B** ！ そんなことを続けるのだった。父はお酒が好きだが飲むと静かになって寝てしまうタイプで酒乱でもない。気が優しいのだからとりえて、一度TVで「ホームレスの人が食べることがないよう、毒をまいてからごみを捨てている」という飲食店の話を見て、<sup>②</sup> **ほんとうに泣いていた。**

昔父は、酒屋を継ぐのがいやで家出をして、外で寝る生活を二か月ほどしていたことがあり、そういう暮らしの中で人の親切がものすごくしみたので、悪意をむけられるそういう人たちのことが **たまらないのだ**、と言っていた。

そんな父を見ていたら、私はあとを継いでもいいなという気持ちになり、せつかくだから大学では醸造を学んでたくさん蔵を見せてもらい、自分の代ではつながりのある蔵のお酒を置きたいな、などと夢想していたので、進路には悩むことはなかった。いつでもお酒の神様を大事にする大きな杉玉のある家で育ってきて、立派ではないが曾祖父の代から住んでいる小さい家を直し直し住んできて、その人生から父のように逃げたいとは思わなかったのは私にとって幸いだろうと思う。

そう、スミおばあちゃんにざしきわらしの話を聞いて、幼い私はおそろしくなった。

ざしきわらしがおそろしいのではなく、もしもざしきわらしがいなくなったら店がだめになってしまうのではないか、という考

えに子供ながらも真剣にとりつかれたのだ。

私はその日から、なぜか天井裏に続く穴がある仏間のとなりの廊下のところに、お供えをするようになった。ちよつとしたジューズの残りや、お菓子のかけらなどだ。それで手を合わせて、ざしきわらしにもうちよつといてくれ、とお願ひする。

蟻が来るしネズミも来るし、あんなことやめなさい！ と母はいやがったが、私の真剣さにうたれて、やがて止めなくなった。

私は十八になるまでたまに③それをやっていたが、家族の誰ももう異様と思わなくなり、天井裏に上がるときに使う踏み台の上はちよつとしたお供えの場になった。

私が大学に行っているあいだにさすがにその習慣はすたれ、たまにお仏壇に供えた果物のはじっこなどを母がひよいと台に載せているような感じになった。

私も、里帰りしてもいちいちお祈りしなくなってしまうた。

それでも家の中はいつもなんとなく活気に満ちていた。私は自分の実家が好きだが、まわりの友達はそうでもないようだった。もちろん一人暮らしに慣れてしまうと親がうつつとうしく思えたり、好きな時間に寝たり起きたりできないのはいやだったが、④それはそれと思っていた。みんなの家にはざしきわらしがないからか？ なんて思ったりしていた。

スミおばあちゃんは私が二十四歳の時に亡くなった。

まだ父が店を元気に切り盛りしているので⑤猶予期間だと思い、地方にある酒造会社に就職し、そこでネット関係の事務をして働いていた。お酒をよりよい形で全国発送することなどいろいろ勉強になり、恋愛もして、まったく地道な忙しい人生を最後に歩んでいた。

それでも、そのときはどうしても帰りたくなり、お葬式には休暇を取って帰った。スミおばあちゃんのお葬式にはスミおばあちゃんに相談に乗ってもらっていた人たちが集まっていて、妙に和やかだった。いい生き方というか死に方というか、そのせいで

お葬式が暗くなかった。まだスミおばあちゃんはそのへんにいて見ている、みんながそう感じられるような温かい雰囲気だった。

「ああ、井崎商店のしいちゃん。」

おばあちゃんの娘さん……もちろんもうすごいおばあさんだが……に声をかけられた。

「忙しいのに、C 帰ってきてくれてありがとうございます。」

父と母が待っていたので、話が長くなると困るなど思い、私はちよつとD した。

「おばあちゃんはね、ほんとはあなたがあとを継いでくれたらいいって言ってた。」

「酒屋のですか。」

「ううん、占いの。」

「無理ですよ、勘も人望もないし。」

「ううん、あるって言ってた。でも酒屋さんにもしいちゃんは必要だから仕方ないって。」

「ありがとうございます。」

私は頭を下げた。⑥ スミおばあちゃんが私を愛してくれたことが嬉しかった。

実家に帰って玄関で塩をまき、父は喪服を着替えて店に戻り、母はいつものように夕飯の買い物に向かい……私もまた喪服を着替えて仏間にごろんと寝転がっていたら、あの懐かしい台が目に入った。幼い私がいっしょうけんめいお祈りした台だった。ただの踏み台だが当時の私には祭壇だった。

古びたお菓子の箱がほこりをかぶって載っていたので、私は立ち上がってそれを捨て、台所から別のお菓子を持ってきて置いて手を合わせて「ずっとうちに来てください」とお祈りした。

それで、またごろんと寝転んでうとうとしていたら、廊下を小さい足がばたばた走っていくのが見えた。



「ほんとだ、いたんだ。急いでなければ見えるんだ。」

⑦ 私は妙に自然に納得し、自分はずっとわかっていたんだ、と思った。

( よしもと ばなな 『おしきむらし』より )

問一 線部 a 「要領をえなかった」、b 「たまらない」のここでの意味として、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、

記号で答えなさい。

a 「要領をえなかった」

- ア 言い回しが古くて、理解しにくかった
- イ 表情が乏しいため、気持ちを読み取りにくかった
- ウ 何を言おうとしているのか、分かりにくかった
- エ 発音が悪いため、聞き取りにくかった

b 「たまらない」

- ア この上なくつらい
- イ 気になる
- ウ 不満で腹立たしい
- エ 我慢ならなくらい嫌だ

問二

A

く

D

に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上使ってはいけません。

- |   |      |   |      |   |      |   |      |
|---|------|---|------|---|------|---|------|
| ア | せいせい | イ | わざわざ | ウ | ふかふか | エ | こっそり |
| オ | てつきり | カ | ぴかぴか | キ | そわそわ |   |      |

問三

線部①

「そういえば」の後に省略されている内容に当てはまるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「私」の父が営む小さい酒屋は、繁盛はんじょうしていて全国的にも有名である。
- イ 「私」の母は家事が得意で、いつも工夫くわうして丁寧ていねいに掃除そうじをしている。
- ウ 「私」の近所の廃校はいは、手入れをしているので、昔のままのように見える。
- エ 「私」の家の雰囲気ふん気は、いつも活気に満ちているように見える。
- オ 「私」の母は園芸好きで、「私」に庭も店もまかせたいと思っている。

問四

線部②

「ほんとうに泣いていた」とありますが、ここからわかる「父」の性格を表す言葉を、本文中から六字以内で

二つぬき出して答えなさい。

問五 ——— 線部③ 「それをやっていた」とありますが、どのような目的で何をしていたということですか。それを説明した次の

文の【 I 】【 II 】に当てはまる内容を、本文中の言葉を使って書きなさい。

【 I 】【 II 】のために、【 I 】【 II 】をしていたということ。

問六 ——— 線部④ 「それはそれと思っていた」とありますが、ここからわかる「私」の気持ちとして最も適当なものを次の中か

ら選び、記号で答えなさい。

ア 友達はざしきわらしにお供えやお祈りをしていないが、人それぞれでかまわないのだという気持ち。

イ 友達は実家に帰ることをあまり好まないようだが、ふつうはそうだから仕方がないという気持ち。

ウ 実家を楽しく明るくするために、ざしきわらしを見つけなければならぬという気持ち。

エ 家族に合わせて生活することは面倒だが、実家に帰ることは好きだという気持ち。

オ 実家に帰っても、自分の好きな時間に寝たり起きたりしたいという気持ち。

問七 ——— 線部⑤ 「猶予期間だと思ひ」とは、具体的にはどのような気持ちですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で

答えなさい。

ア 酒造会社に就職して恋愛や仕事で忙しいので、できることなら、親と離れてこのまま地道に今の仕事を続けたい。  
イ お酒の知識の足りない自分が一緒に働くと、ただでさえ小さい店の信用がなくなってしまう、つぶれてしまうだろう。  
ウ 今はまだ、父が元気に店を切り盛りしているのだから、父が病気で働けなくなるまでは実家に帰りたくない。  
エ せっかくネット関係の仕事が面白くなってきたので、その知識を生かしてお酒の全国発送のシステムを開発したい。  
オ まだ実家の店を継ぐまでは時間があるから、将来のためにお酒のことや販売方法などについてもっと勉強したい。

問八 ——— 線部⑥ 「スミおばあちゃんが私を愛してくれたこと」とありますが、「私」がそのように感じた理由として最も適当

なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 酒屋のあとを継ぐのをやめて、ぜひ占い師になってほしいと、スミおばあちゃんが「私」に言ってくれたから。  
イ スミおばあちゃんは亡くなった後に、「私」にざしきわらしが見える特別な能力を授けてくれたから。  
ウ スミおばあちゃんは、占い師のあとを継ぐ能力を認めながらも、「私」が酒屋を継ぐことを優先してくれたと聞いたから。  
エ ざしきわらしが見えないと嘘をついた「私」を、スミおばあちゃんは占い師のあと継ぎにしたいと言ってくれたから。  
オ スミおばあちゃんは亡くなった後も近くにいて、「私」を見守り優しい言葉をかけ続けてくれるから。

問九

——線部⑦「私は妙に自然に納得し、自分はほんとうはずっとわかっていたんだ、と思った」とありますが、この場面での「私」の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 明るく人情味のある環境で育った「私」は、ざしきわらしに温かく見守られながら生きてきたのだということに気づいた。
- イ ざしきわらしが見えたことで、両親の期待にこたえて実家の酒屋を継ぎながら占い師としてもやっていけそうだと確信した。
- ウ 「私」にざしきわらしを見る力が備わったのは、両親が明るい性格であったからだということに気づいた。
- エ 「私」が小さいころに一生懸命にお祈りをしたから、家族みんなが健康なうえに、今の酒屋があるのだと確信した。
- オ スミおばあちゃんが、「私」のためにあの世からざしきわらしを連れてきてくれたことがわかり、感謝している。

【問題はこれで終わりです。】

国 語 解答用紙

受験番号

【一】

問一	問一
⑤	①
	いた
⑥	②
	③
⑦	④
	く

問二	問三
①	①
	( )
	( )
	↓ ( )
	( )
	↓ ( )
	( )
	↓ ( )
	( )
	↓ ( )
②	②
	( )
	( )

【二】

問一	問二
A	
B	

問三	問三	問三

問四	問五

問六	問六	問六

と考えられるから。

問七	問八
I	a
II	
III	
IV	b
	問九

【三】

問一	問三
a	
b	問四
	●
問二	
A	●
B	
C	
D	
ために、	

問五	問六
II	
I	
をしていたということ。	問七
問九	

【一】

問一	問一
⑤	①
悲喜	きいた
⑥	②
裁断	かなめ
⑦	③
操縦	おうじょう
⑧	④
博学多才	築く

問二

①	観察
警察	警察
察知	など
②	担任
責任	責任
任務	など

問三

②	①
(ウ) ↓ (ア) ↓ (エ) ↓ (イ)	(エ) ↓ (イ) ↓ (ア) ↓ (ウ)

【二】

問一	問二
A	産
イ	業
B	革
ウ	命

問三

る	に	右
よ	前	手
う	に	と
に	出	右
し	し	足
て	、	、
、	腰	左
す	か	手
り	ら	と
足	上	左
で	を	足
歩	大	と
く	地	を
と	に	、
い	平	そ
う	行	れ
歩	移	ぞ
き	動	れ
方	さ	同
。	せ	時

問四

水	田	稲	作
問五			
所作			

問六

れ	て	身
、	、	体
習	あ	所
得	た	作
さ	か	は
れ	も	、
伝	言	他
播	語	人
す	の	に
る	よ	対
、	う	す
ひ	に	る
と	集	ひ
つ	団	と
の	の	つ
文	中	の
化	で	表
で	用	現
あ	い	と
る	ら	し

と考えられるから。

問七

I	オ
II	エ
III	ウ
IV	イ

問八

a	身	体	の	想	像	力
b	同	調	問九			
ア	ア					
オ	オ					

【三】

問一

a	ウ	問二	A
b	ア	カ	B
A	カ	エ	C
C	イ	D	キ

問三

エ	問四	●	人	が	よ	す	ぎ	る	●	気	が	優	し	い
---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

問五

II	お供え	I	ざしきわらしにもうちよつといてくれるようお願いする	ために、
----	-----	---	---------------------------	------

をしていたということ。

問六

エ	問七	オ
---	----	---

問八

ウ	問九	ア
---	----	---

問 次の文章を読んで、「言葉」についてあなたが感じたことや考えたことを、具体的な例を挙げながら六〇〇字以内で書きなさい。

会社や学校で、どうも人間関係がうまくいかない。心を許せる親しい友達ができないという人が増えている。うつなどの心を病む人も増加の一途をたどっている。こういった状況は、言葉の使い方がお粗末になってしまっていることと無関係ではないように思う。「ものは言いよう」と言う。少し前まで、日本人は、「言葉じようず」「言い方じようず」で通っていた。

相手と直接的な対決を避けるちよつと遠回しな表現や、あえてピントをぼかした巧みな表現、相手を傷つけないようにと気づかう温かな物言いをしていたものである。

見知らぬ人であっても、「袖振り合うも多生の縁」といい、さりげなく言葉をかける。だからといって、必要以上に深入りしたり、ずるずる後に引きずるわけではない。そんな絶妙な距離感をわきまえた会話のコツや自分の身の置き方を、誰もが当たり前のように身につけていたものだった。

だが最近では、相手の心情など考えず、自分の言いたいことだけをストレートに言うだけ。それでも、言葉があればまだいいほうで、何も言わずに、自分のやりたいことだけをやりたい放題にやって終わりということもめずらしくない。

言葉とは、もともと、自分の思いを相手に伝える手段であったはずだ。相手への思いがこもった言葉が聞かなくなったということは、誰もが心づかいや気配りをおろそかにするようになり、他人に深い関心を持つことがない、そっけない世の中になったことを示しているように思えてならない。

たとえば、飛行機や列車に乗った時、荷物を棚にのせようとしている人のそばを通りかかった。そんな時、見知らぬ間柄であっても、「大丈夫ですか」と声をかける。すると、相手は、「はい、大丈夫です。ありがとうございます」と答えてくれる。こうしたちよつとした会話があるだけで、人は、自分に注がれるやさしい目線のあることを知り、あらためて、人と人が支え合い、助け合って生きていることを確かに感じ、ほつと心が温まり、和むと思う。

(菅原 圭 『日本人なら身につけたい品性がにじみ出る言葉遣い』より)